THE 行動援護

事例を通して考える現状と課題

宇治田原むく福祉会　居宅支援部

2023年10月13日

1

目次

１．今回の事例
２．Yくんのプロフィール・支援内容
３．支援の目的
４．タイムスケジュール
参考資料：過ごし方の写真など
５．支援で使っているツール紹介
６．やってみてうまくいったこと・いかなかったこと
７．支援場面での課題と取り組み
８．Yくんの支援を通じて学んだこと
９．おわりに

2

１．今回の事例

Yくん、特別支援学校高等部１年生

行動援護（二人介助可）を利用

支援の様子を紹介しながら、視覚的支援の必要性、支援手順を守ることの大切さについて再確認し、強度行動障害の方に対しての支援方法について理解を深めたい

※今回の研修資料は、Yくんのご家族に了承を得て作成しています。

3

２．Yくんプロフィール・支援内容

- 特別支援学校高等部１年生
- 小学部より当法人の日中一時サービス、児童デイサービスを利用
- 集団での過ごしが難しくなり、小学5年生時の3月から、行動援護の利用が始まる

【学校での過ごし方】

- 個別教室で個別のプログラムで一日の大半を過ごす。
- 先生とマンツーマン。
- ２０２２年４月に新学舎へ移転がきっかけで、トイレでの排尿が可能になり、自立課題に集中して取り組めるようになる。
- 環境の変化がプラスに転じている。
- 通学時間が短縮されたことで、通学バスも「特別ブース」ではなく通常の着席での利用ができるように。

4

行動援護での支援内容

項目	様子等
利用頻度	週一回
利用時間	放課後３時間
支援内容	本人の好む屋外での散歩・遊びやドライブを取り入れた外出支援
支援課題となる行動	人を押す、たたく、かみつくなど。（パニック時、進路に人がいるなど） 行動の制止に対し強い抵抗を示す。 衝動性が強く感情のコントロールに困難さがある。（定期的に通院、服薬調整） 強い偏食と異食（道端の雑草やプララベルなど）。 感覚過敏。泥や水などの感覚遊びを好む。 見通しが持てないことでの不安が強く、新しい活動や場所には「１回目は入れない」ことが多い。 「今日は外に行かない（行ける）」「今日は○○という行事がある」などの情報は十分な理解ができず、周囲の様子から「何かある」と感じることができるのみ。 本人は常に周囲の状況に対し不安を抱えている。
得意な行動	情報は視覚優位。 慣れた活動や場所では安心できる。

5

3.支援の目的【サービス等利用計画】

①ご家族の希望

- ストレス軽減、気分転換、楽しく過ごしてほしい
- 穏やかなコミュニケーションができるように

②長期目標

- 視覚ツール等を活用し、自分自身でスケジュールを確認し落ち着いて過ごすことができるようになる。
- いろいろな場所に外出し、気分転換が図り、ストレスが緩和できる。

③短期目標

- スケジュールを元に見通しを持ちながら楽しく過ごすことができる。
- 支援者と信頼関係を築き、穏やかに安心して過ごすことができる。

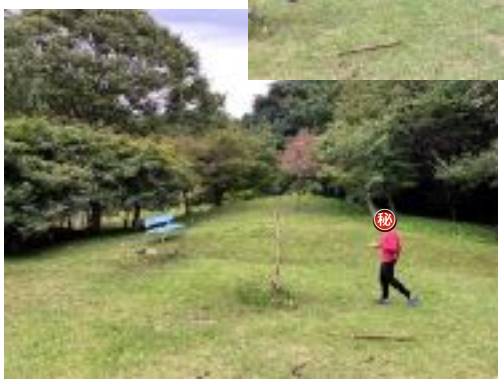
6

４．タイムスケジュール

13:30　支援学校お迎え
　　公用車乗車　予定確認　ドリンク・おやつタイム
14:00　袋谷親水公園　ドリンク・おやつタイム
14:30　トイレ（排泄支援）
15:30　青谷親水公園
16:00　ドリンクタイム
　　トイレ（排泄支援）
16:30　自宅到着

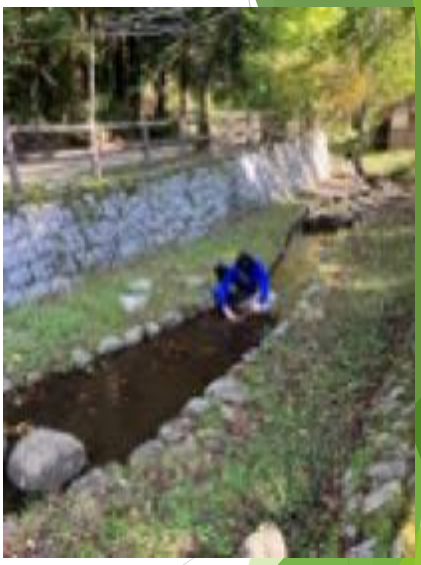
7

公園で



8

袋谷親水公園の水路で



9

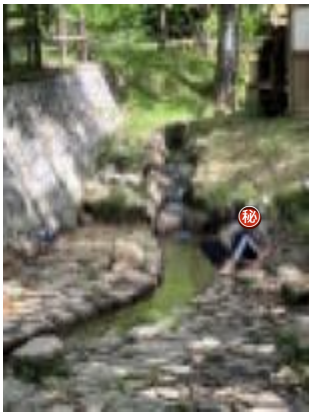
水たまりがあるとき・・・

10

川辺で（青谷親水公園）

11

自分の時間を過ごす



12

5．支援で使っているツールの紹介

①間仕切り、選択カード

②ブランケット

③ついたて（屏風）

13

①間仕切り・選択カード

- 運転席と二列目の間に間仕切りを設置（安全運転への配慮）
- 【左写真】予定が「見てわかる」
- 【右写真】ほしいものが「伝えられる」

14

視覚的に分かりやすく伝える「さわらないで」ほしいときに

- トイレでの排泄の際、手洗い所などの水道が気になります。
- 水や備品で遊んでしまうことがあります。
- ヘルパーが準備（薬品やペーパーを隠すなど）をしてから入室。
- 触って欲しくない物を事前に視覚的に伝えることで、不適切な行動を防ぎます。

15

②ブランケット

- 後部席がいろんな理由で濡れる
- 本人の不快感・それに伴う困りごとが発生

↓

- 布一枚（ブランケット）で軽減

16

③移動式プライベート空間　「ついたて」

- 公園や川で使う簡易的な衝立
- 服を脱いだ際、本人の周囲を覆うようにヘルパーが持つ
- 持ち運びやすく重宝

（当法人スタッフ制作）

17

6．やってみてうまくいったこと・いかなかったこと

＜事例１＞

施設内キッチンへの強い固執があり、入室制止に対し、たたく・かみつく・力づくで入ろうとする。キッチン内に菓子を見つけ、固執は何週間か続いている。

放デイ利用者が多く、それぞれの活動をしており、入室を防ぎたい・・・

➡（対応）

キッチンの棚・冷蔵庫から食べ物を一時的に無くした状態で本人に見せた

⇒（結果）

本人の手で、棚をすべてあけ、キッチンの中に「食べ物がない」ことを見て確かめた。

次週より、キッチンへの固執がなくなり近づくことはなくなった。

18

＜事例２＞

外出先（山の上の展望台公園周辺）での突然の気持ちの崩れ（パニック）に遭遇。

泣き叫び、猛ダッシュ。山の斜面の方に降りて行こうとしたので、落ち着かせ、安全なところに誘導するためにヘルパーが近づいたところ、抱っこを求められた。

抱っこしたとたん、スタッフは頭突きを受け、こめかみに噛みつかれた。

➡（その後の対応）

一人になれる場所の確保（車内・森林の木陰など）

近づかないでそっと見守る。

⇒（結果）

自分から「落ち着く場所」（車・公園内の静かな場所など）へ行き、ひとしきり泣いたり砂をいじったりして気持ちを落ち着けようとされる様子が見られる。

★落ち着く目安は15分　この間にヘルパーは次の段取りをする！

19

＜事例３＞

外出先の水遊びで服が濡れると、その場で服を脱いで裸になってしまう。

裸になってもすぐには遊びがやめられない。

公共の場で裸になることは避けたい・・・

➡（対応①）

水遊びの前に「水着」に着替えてもらう支援を行う。

「着替える」絵カードを提示しておき、現地についたら水着を渡し「着替えよう」と誘う。

⇒（結果）

着替えない。水着を返却し拒否。
（学校でも、水着に着替える取り組みは未完に終わっている）

➡（対応②）

水遊びで服が濡れ、服を脱ぎ始めたら、「ついたて」で本人を囲い、裸になっているところが周囲の目に触れないようにする。

⇒（結果）

「ついたて」で囲まれたら、水遊びをやめ、車へ移動するようになった。

20

７．支援場面での課題と取り組み①

①行動を制止されたときの他害行動

→行動予測・フットワークで安全に対応

予め「制止しなくてよい」状況を作る

②「指示が入りにくい」「本人の不安が強い」

→スケジュールボード・絵カードのやりとりを継続し、見通しが持てる状態に

③遊びを切り上げられない時「そろそろ帰る時間」を分かるには？

→終わりの「サイン」を試す。（予めのスケジュールで行動を調整しつつ）

21

７．支援場面での課題と取り組み②

④「どこまでOKか」教える

→（池で。水たまりで。川で。水路や溝蓋のあるところで）

⑤「マナー」を教える

→パターンで学習してもらう

「水たまりには入らない」「服は、着替え場所で脱ぐ」「排泄はトイレで行う」など

⑥「(本人の）選択肢を広げる」

→おでかけ可能な場所・立ち寄れる場所（トイレ）を開拓する！

22

8．Yくんの支援を通じて学んだこと

- アセスメントの大切さ（家庭・学校との連携）
- 見通しがもてていることで安定する
- パニック時の対応　～距離感・落ち着くまでの安全確保と時間の見通し
- 決めた「支援手順を守ること」の重要性
- 視覚ツールの役割（主体は本人！）
  ①スケジュールが分かる（見通しが持てる）
  ②コミュニケーション手段
  （欲しいもの、行きたい場所などが伝えられる、選べる）

- スモールステップで「一足飛びにいかないこと」を心がけて支援する
  ステップの幅はそれぞれ違う

23

おわりに

外出支援は、Yくんの生活の**ほんの一部分**。

とはいうものの・・・
その一部分を支援するにあたっても、
家庭生活や学校生活の様子を知らずして支援することはできません。

計画相談・ご家族・学校の情報をもとに、
本人の生活や支援の全体像をとらえ、地域支援部で共有し、

将来彼がどんな暮らしができるか想像しながら、
居宅支援部として外出支援の在り方を今後も模索していきます。

24